序の舞 上

宮尾登美子

朝日新聞社

序の舞

上

宮尾登美子

朝日新聞社

昭和五十七年十一月三十日　第一刷発行
昭和五十八年二月二十五日　第六刷発行

序の舞　上

定価　一二〇〇円

著者　宮尾登美子
挿画　下村良之介
装丁　熊谷博人
発行者　初山有恒
印刷所　明善印刷株式会社
発行所　朝日新聞社

〒104　東京都中央区築地五―三―二
電話　〇三―五四五―〇一三一（代表）
編集　図書編集室　販売・出版販売部
振替　東京〇―一七三〇

© T. Miyao 1982

0093-255042-0042
Printed in Japan

目次

奈良物町　5
画塾　102
螢の宿　178
落椿　259

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

序の舞　上

奈良物町

京の春の暮れがたの長いこと、これでは店仕舞うてからの晩御飯まで子供たちおなか保たへんのやないか、と考えて勢以はしり元に立ち、このあたりでほっしん、と呼ぶ、釜のおこげの干した飯粒を缶から出して鍋でカラカラと炒り、さっと砂糖をからめて小皿に入れると間の長暖簾から表に首を出して、

「志満、つうさん、こっちへ入っといやす」

と声をかけた。

「はあい」

と間のびした返事をして火鉢のねきに寄って来たのはことし七つの志満だけで、三つの妹津也の姿はなかった。

「つうさんはどうしたん?」

と聞くと、この子のくせの、着物の八つ口から両手を差し込んだままのどかな様子で、

「さあ、いんままでおったんやけど」

というだけ、ふだんの勢以なら「そうか」とあっさり、
「戻って来たらあげるわ」
と小皿は水屋に蔵っておくのだけれど、この日ばかりは何となく胸騒ぎがして、すぐ下駄を突っかけて表に出た。
ここは御幸町の四条通りを南へ入った奈良物町で、勢以が女手で営む葉茶屋の向う三軒両隣もみな間口二、三間の商家である。上隣は、ときどき白い湯気が渦を巻いて道まで流れて来るおまんやさん、下隣は金銀紅白の熨斗や水引きを売る店で、真向いは唐傘を張っている美濃屋さん、ここだけは傘の干場が必要なので店構えはぐっと広く、入口には石畳を張ってある。
商家が軒を並べているわりにこの通りはさして騒々しくはなく、ゆきかいの下駄の音も気のせいか何となくしめやかだが、それというのもも一つ東が寺町通りで、あたたかい東風の日など線香の匂いがここまで流れて来て町の埃を鎮めてくれる、そのせいもあるのだろうか。
勢以はふだん着の、紺木綿の長いひっぱりを着たまま往来に立って見廻してみたが、寒さも去ってものの影が急に長くなった道には子供の一人も見えず、角の散髪屋まで小走りに駆けて行って、はしたないことと判っていながら看板の下から顔を差し入れ、
「ちょっとごめんやっしゃ。うちの津也見まへなんだか？」
と聞いた。
店に客はおらず、主の久吉は上り框に斜めに腰をかけて煙草を吸っているところで、
「今日はいっぺんも見まへんなあ」
と煙管のやにをスパスパと吹きながら、
「そうや。さっき砂絵描きのおやっさん町内へまた来てたん見たなあ。それ見てるんやおへんか。

つうさん砂絵が好きどっせ。いっつも真剣勝負みたいな目えして睨んでますんや。
きっとおやっさんについて廻ってるん違いますやろか」
久吉床の主にそういわれて勢以はそや、砂絵描きのおやっさんや、と気がつき、あわてて引っ返すと今度は前の傘屋を訪うた。
砂絵描きというのは年のころ五十余り、蓬髪に垢染みた絣木綿を着てねずみ色になった白袴をはき、腰に砂袋を下げてときどきあらわれる男で、町内ではいつもまっすぐ傘屋の門口へ行って、
「ここ、よろしか」
と一言かけておいてからやおら仕事に取りかかる。
傘屋の前と決めてあるのはここが石畳だからであって、おやっさんは先ず小箒で我が画布となるべき広さをさっさっと払い、腰の砂袋から白、黒、黄、藍、赤の五色の砂を取り出し、機嫌のよいときは、
「今日は何にしょ」
と取り巻きの子供たちに注文を求めるが、日によっては一言も発せず、いきなり石畳へじかに得意の馬を描いてゆく。
おやっさんの大きな掌に握られた砂は人差し指の穴から拇指でするすると揉み出され、ときには針金のように強く、ときには絹糸のように細く、おやっさんの意のままに縦横無尽の線を引いて、みるみるうち大地にさまざまな絵を浮き上らせる。四季の花々、富士山、天狗、犬、猫、とおやっさんの持ち駒はたくさんあるが、なかでも得意の馬は勢いのいい奔馬で、おやっさんはそれを、
「神馬やで、天馬やで」
と自画自讃する。

この辺りは寺町の近い関係でもの売りもの乞いが多く、いちいち関わり合うてたらかなわん、と町の人はいい、ほとんどを、
「お通りやす」
でやり過ごすけれど、このおやっさんだけはいつも美濃屋が、
「だんないえ」
と許すのはそこに見世物としての値打ちを認めているせいなのであろう。
描き終わるとおやっさんは見物人たちの、
「巧いもんやなあ」
の讃辞と、一銭か二銭のお恵みをもらえば色砂をまたもとの袋に納めて店じまいをするが、ときに美濃屋が三銭も張り込んでやると、
「置いときまっさ」
と絵をそのままにして帰って行くこともある。
傘屋の門口に、五色の衣裳を着た弁天さんがにっこり笑顔で寝ていれば客寄せとしても効き目があり、人はそれを、
「美濃屋はん、あたまよろしな」
といいつつ近寄り、つい番傘の一本でも買うという羽目にもなる。
桐油のぷんぷんする傘屋の店先に立って勢以が砂絵描きのことをたずねると、よく肥った内儀は前垂れで手を拭き拭き、
「うちの次いうたら神明さんやおへんか。あこは参道広いし、なんぼでも大けなもん描けますさかい」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

神明さんというのはつい目と鼻のさきの四条通りの角にあり、祇園御旅所と金蓮寺に挾まれた皇大神宮で、境内が広いので寺町のなかではここがいつも子供たちのよい遊び場になる。

たぶん三つの津也も姉に手を引かれ、ここまで遊びに来たことはあるだろうけれど、勢以は日常、二人が外でどんなふうに過しているやら全く知らなかった自分を思った。女の子だから、店番のかたわら、ななこでおじゃみをしたり、糸とりや千代紙でおやまさんごっこの相手はしてやっても、客が立て込むとときには、

「外、行っといなはい」

と追いたてたりし、そういうとき二人は、見知らぬ人についてふらふらと遠くへ行くこともあるやも知れぬと思うと、いまに始まったことではないが子供たちがひどく不憫に思われる。

世間では勢以のことを男運の悪いおひととか、後家相とかいうけれど、勢以自身は自分の運命について深く嘆いたことはなく、ただ子供たちのことを思えば二人とも父親に縁のうすいたちやなあ、とは感じる。最初に婿に迎えた志満の父仙吉は放蕩もので、これは勢以自ら決断して実家へ帰し、次の弥兵衛は津也の生れる二カ月前、突然急病で儚なくなってしまった。

志満は生れてのちわずか半年、津也は全く父親の顔を知らず、そういう二人を二十六で後家となった勢以がわが羽の下にかばいながら渡る世間は決して生やさしいものでなく、人にあなどられまいとして気を張って来た今日までの月日のうちに、いつのまにか子供に対する目の配りが欠けていたのではなかったかと勢以は思った。

町内に砂絵描きがやって来ることは知っていても、まだ三つの津也が見物の輪の最前列にしゃがんでいつも熱心に見ていることは今日のいま、久吉床にいわれるまで気付かなかったし、たぶんそのおやっさんについて行っているであろうほど心を奪われていることなど、考えてもみないことで

あった。
　あの子はひょっと、砂絵描きを自分のお父ちゃんと間違うてついて行ったんかも知れへんなあ、と思うと心急き、前のめりに足を早めて神明さんの鳥居わきの大銀杏まで辿りついて、そこに傘屋の言葉どおり、人の群があるのを見てほっと息を吐いた。近寄ってみると案の定砂絵見物の輪で、物日でもない限りここはふだん子供ばかりだが、今日はどうやらお宮詣りの一組があっておやっさんにもお祝儀が出たらしい。
　勢以が捜すまでもなく、もう色砂を仕舞いかけたおやっさんのまん前に津也は膝にあごを載せてしゃがみ、久吉床のいうようにまるで睨みつけるような目ざしでそれを眺めている。西に傾いた陽ざしを顔半面に受け、瞬きもせず砂絵の崩れてゆくのをみつめている津也を見たとき、勢以は思わず、
「まあ、死んだあの子のお父ちゃんそっくり」
　と思った。
　津也が生れたとき、近所の人たちは、
「お父ちゃんの生れ替りえ。ほんま生写しとはこのことどすなあ」
　と口を揃えていい、勢以もそういえば眉の凜々しさ、きりっと目尻の上ったところなどよう似てる、とは思ったものの、その言葉のなかには、臨月を控えて突然後家になってしまった自分への慰めも込められているとも考えていたところがあった。
　いま、おかっぱの端が眉をかくすほどに俯むき、一心におやっさんの手許をみつめている津也の表情は、弥兵衛生きてある日の、よく考えごとをするときのむつかしそうな顔にそのままぴったりと重ね合わされて来る。勢以は思わず胸溢れ、駈け寄って、

「つうさん」
と声をかけ、自分からしゃがんで背を向けて、
「さ、おたたしょ、早う家へ帰ろ」
と後へ廻した掌をひらひらさせた。
津也はまだ未練げに石畳の上を見ていたが、おたたに誘われ、小さな塗り下駄のまま母の背におぶさるのを勢以はゆすり上げて、
「砂絵のおやっさん、好きなんか」
と聞くと、口の遅い津也は、
「ふん」
とだけしか答えないかわり、背中で二度ほど飛上ってみせた。
見つけたらきつうおこってやりまひょと思っていたけれど、亡き夫に似た子をこうして手紐で背負うてみると、勢以の身内には久しく忘れていたなつかしさがひたひたと満ちて来るような感じがあった。
そういえばこの子をおぶってやるのはいく月ぶりやろか、と考えれば、しっかりと歩きだした頃から何でも、
「一人でおし」
ばかりで、膝に抱きあげたり頭を撫でてやったりしたこともろくになかったように思う。
今年二月、京都から神戸へ汽車が通ることになり、それに伴って七条にステンショが落成したとき、洛中洛外とも各戸に国旗を掲げ幕を張り、この町内でも四条通りに花門を作り、夜は提灯行列に出て大へんな賑やかさであった。

「天皇さんもお還りやそうな」
と町内誘い合って西洋風のステンショを見物に出かけたものだったが、勢以はそのときも行きはせず、志満にねだられても、
「消えてのうなるもんやなし、あわてて見に行かんでもよろし。もっと大きなって一人で汽車に乗れるようなったら、せえだい見物したらええやろ」
と応じなかった。
両親がなくなってまだ十年に足らず、夫弥兵衛の死後ならまだまる二年といういまの勢以の境涯では物見遊山など気持は動かず、店の切り盛りでせいいっぱい、子供をおぶっての近所めぐりなどついぞしたこともなかったのである。
京の盆地は風少なく、地質が固いので埃が立たぬといわれるが、春花見どきともなれば何となく四方が霞み、足袋と着物の裾の汚れがひどくなるように思う。
勢以は、もうたそがれて来た町をゆっくりと遠廻りして帰りながら、自分のように家居ばかりして外出をしない親の子は、京の町の道もなかなか覚えられないかも知れぬ、と思い、迷い子になったときの用心に、
「なあつうさん、お母ちゃんがいまから京の通り唄いうよって、よう覚えてや」
と津也を揺りあげ、
「みんなうとうてる唄やし、これ覚えといたら便利え」
京は碁盤の目のようやさかい、東西の通りを、
「丸竹夷二押御池、姉三六角蛸錦、四綾仏高松万五条」
これは丸太町、竹屋町、夷川、二条、押小路、御池、姉小路、三条、六角、蛸薬師、錦小路、四

条、綾小路、仏光寺、高辻、松原、万寿寺、五条のこと、南北は、
「寺町御幸麩屋富柳、堺高間東車、烏丸両替室衣、新釜西小川、油醒ケ井堀川の水」
は寺町、御幸町、麩屋町、富小路、柳馬場、堺町、高倉、間之町、東洞院、車屋町、烏丸、両替町、室町、衣棚、新町、釜座、西洞院、小川、油小路、醒ケ井、堀川と、これだけ一ぺんに覚えるのはなんぎやけどなあ、と勢以は繰返しうたいながら、自分がこの唄をけんめいで覚えたのは十の年だったと思った。

勢以は記憶のいいたちで、自分の九の年に起った運命の変り目の前後のことは、いまでもはっきりと目に浮んで来る。

勢以の生家はもと河内の在の地主で、嘉永年間に大徳寺北方の愛宕郡大宮村の紫竹に移り、京の町向けの荷受け業を営んでいたが、この家に島村甚八が訪ねて来たのが安政五年の春であった。

甚八は高倉三条南入ルの名代呉服屋ちきりやの番頭をしていてこの頃五十歳前後という年恰好ではなかったろうか。妻くらとのあいだに子が無く、このままでは血筋が絶えてしまうので縁故を捜していたところ、勢以の母麻の実家と甚八の家系とが繋がっていることが判り、ぜひとも勢以を養女にもらい受けたいという。

そのときの甚八のはなしに、天保の乱を起した大坂町奉行所与力大塩平八郎の甥という男が島村と名乗り、身分を隠してちきりやの客分として逗留したのが甚八の腹違いの兄に当るのだそうで、番頭とはいえちきりやとはその縁以来の間柄だということであった。

「そんなら島村さんはただの商人やのうて、もともとはお侍さんの出どしたのか」

夫婦は丁重にもてなし、麻の血筋のあちらこちらの人の名も出て双方納得のできたところで「さし上げまひょう」「頂きまひょう」の話が仕上ったのだという。

もとより子供の意志など問題ではなく、勢以とても、
「女子はどうせ他家へ嫁かんならん。早い遅いの違いだけやし、血い引いてたほうがなんどのときには頼もしい。家もようつろくしてるしなあ」
と親にいわれれば下に利作、寛作の二人の弟がいることを考え、少しは心細くとも「はい」と潔よい返事をせざるを得なかった。
島村の家はちきりやのすぐねきにあり、定石どおりべんがら格子にむしこ窓の住みにくい構えで、勢以は歌に聞いた、
京の三条衣棚
聞いてごくらく
居てみて地獄
おかゆかくしの長のれん
は子供心にほんとうだと思った。
ものの倹約には馴れていても、京の町家はどこも南北に長く建てられていて陽当り悪く、冬は底冷え夏は蒸し風呂、大宮村のひろびろとした暮しとは較ぶべくもなかったが、しかしほどなく子供なりに了簡ができたのは、これが十歳の分別というものだったろうか。
もし勢以が二十過ぎてもらわれていたら、養父母と悶着起こさなかったとはいえず、その意味からいえば甚八、くらの言葉をそのままっすぐに胸の奥に彫りつける素直さがあった。父の甚八は男だけにもののいいかたも快活だが、母くらは根っからの京女だけにぬるぬるしていてはっきりせず、勢以はときどき、
「何のことかいなあ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c